



# HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	学校における福祉教育の影響
Author(s)	角島, 緑
Citation	教育福祉研究, 1, 30-38
Issue Date	1991-03
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/28311">https://hdl.handle.net/2115/28311</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	1_P30-38.pdf



# 学校における福祉教育の影響

角 島 緑\*

## 1 はじめに

ひとはみな、平等に人間らしく生きる権利をもっているといわれるなかにあつて、いまなおさまざまな面でハンデキャップをもつひとたちの多くが、日常生活の多くの場面で、当然の権利を保障されないままに生きている。就学、就労など人生の節目節目にぶつかる大きなものから、普通に街を歩くといった、ごく日常的なものまで、いたるところで苦痛を強いられる環境にあるといえるだろう。本論文では、このような環境をつくりだしていると考えられる、人々の福祉意識に注目し、その意識を高めるための福祉教育の役割について、学校教育の場面に絞って考察することとする。

この課題を考えるにあたり、実際に社会福祉に対して強い関心をもっていると考えられる、社会福祉専攻学生 267 名に対してアンケート調査を行なった(1990年10月実施)。対象者の内訳は、北星学園大学(社会福祉コース1年)76名、帯広大谷短期大学(社会福祉科・介護福祉科1年)106名、日本福祉学院専門学校(総合福祉科1年)85名である。その他、北星学園大学(心理学コース)49名にも同様のアンケートを実施した。また、学校における福祉教育の影響をみるため、ボランティアを中心とした福祉教育を積極的に行なっている高校(秩父別高校)の全校生徒143名にもアンケートを行なった。(1990年9月実施)。

前者のアンケートではまず、学生の家族環境や社会福祉に関心をもつようになったきっかけについて聞いた。そのうえで、学校における福祉教育に注目し、その教育を受けた経験と興味の有無、

今後の必要性についても聞いた。福祉教育の福祉意識に与える影響や学校教育への位置づけについてみるためである。後者の福祉教育実践高校へのアンケートは、その教育「効果」を明確にするため、とくに教育前後の気持の変化を中心に聞いた。以下は、とくに断りのないかぎり以下二つのアンケート結果に考察を加えたものである。

なお、文中では、福祉教育の概念を教育内容上、三つに分類してとらえ、区別して使用している。愛情や幸福、思いやりなど、ヒューマニズム的な心を養う「福祉教育」、それに、より社会的な要素を含み、基本的人権の立場から教える「社会福祉教育」、将来社会福祉の専門職につく人のために必要な知識、技術、心構えなどを教える「社会福祉専門教育」である。

## 2 学校における福祉教育

福祉教育は上記のように整理されるかと思われるが、社会福祉それ自体が、戦後とくに1960年代になってから定着してきたものであることから、教育実践の場への位置づけは浅い。とはいえ、この教育は、すでに全国的に試みられていることも事実である。そこでここでは、まず学校における福祉教育の現状を確認しておきたい。

### (1) 学校における福祉教育の到達点

学校における福祉教育は、1977年から始められた、厚生省、全国社会福祉協議会の「学童・生徒のボランティア活動普及事業」を中心として行なわれており、協力指定校数は年々増加の傾向をみせている<sup>(1)</sup>。しかし実際の教育は、まだ実践経験が浅く、マニュアル的なものもあまりないことなどから、とりくみはほとんど個々の学校にまかされているのが現状である。1983年に、全国ボラン

\*北海道大学教育学部1990年度卒業、中学教員予定

ティア活動振興センターが、全国の「社会福祉協力校」のうちの587校(小学校309校、中学校147校、高校131校)に対して実施した調査によると、福祉教育の学校での位置づけは、その8割までが「特別活動」といった一部の教科、領域であることがわかる<sup>(2)</sup>。そしてその「特別活動」のなかでも、学校行事として展開させているものは、教育段階があがるにつれて激減し、逆にクラブ活動として位置づける割合が高くなっている。つまり、指定を受けている学校でさえも、その学校の一部の生徒にしか福祉教育を体験させていないという傾向がみられるのである。この事業の主体があくまでも社会福祉側からのものであり、学校側の主体的な意志によって行なわれているものではないということが、実践の形骸化を生む原因となっているのであろうか。

このような状況は、しかしながらここ数年、新しい動きもみせ始めている。1986年以降、臨教審の答申を受けて、ようやく教育側である文部省も「人間としての在り方生き方」教育といったものを重視するようになってきたからである。しかしそれは、「日本型福祉社会」の確立、つまり、福祉教育によって人々の間に相互扶助的な精神を養わせ、お金のかからない社会福祉体制をつくりあげようとすることに、文部省も加わり始めたとも考えられることから、これを一概に福祉教育の進展とみることはできないようにも思う。そのため今後の福祉教育は、内容面での十分な吟味が必要となってくるとともに、教育する側としての学校や教師の社会福祉のとらえ方、何をどのように教えるかが新たな焦点になってくるとも思われる。

## (2) 北海道の状況

次に、学校における福祉教育の現状を、北海道での状況に絞ってみる。前述した「学童・生徒のボランティア活動普及事業校」に指定されている学校の状況から検討する。

道内で指定を受けている学校は、全体で13.2%(小学校9.4%、中学校14.9%、高校28.2%)となっており、教育段階があがるにつれて指定校率は高くなっている。指定校の特徴を高校に限定し

てみると、指定校90校中、公立校71校、私立校12校、不明7校となっている<sup>(3)</sup>。このうち、公立高校71校における学校ランク(北海道の公立高校入試の際、判断の目安とするもの)を一応在学生徒の「学力レベル」とみなしてみると、いわゆる「進学校」と呼ばれている学校は、ほとんど指定校になっていないことがわかる<sup>(4)</sup>。また教育実践内容については、全体的にボランティア活動などの体験中心の実践教育がその大半を占め、教科でのとりくみはまだあまり行なわれていない状況にある。教育領域においては、全国の傾向と同様、大半が「特別活動」の領域にとどまっている<sup>(5)</sup>。

以上のことからすると、学校における福祉教育を受けている者は、きわめて少数でしかなく、実際に受けている者も、地域の底辺校や宗教教育の可能な私立校の生徒に偏っており、また指定校の生徒であっても、そのなかで比較的社会福祉に関心の高い、ごく一部の生徒しか福祉教育にふれていない現状が推測される。近年、政策としてもうちだされ、注目され始めているものの、社会的な要請に大きく規定される学校教育の壁のなかで、「限定されている」というのが、福祉教育のおかれた率直な現実であるだろう。

## 3 社会福祉専攻学生の福祉教育の経験

福祉教育は、全国的にも、また北海道においても、まだ学校のなかに位置づいていない。このような状況をふまえたうえで、社会福祉専攻学生の福祉教育経験についてみてみよう。ここでは福祉教育を、教育実践上、同じ学校内に障害児と健常児とがいる「環境」をつくりだす交流教育、国語

表1 社会福祉専攻学生の福祉教育を受けた経験の有無

	あ	る	あるはずだ	な	い	N.A	
交流教育経験	193	(72.3)	—	73	(27.3)	1(0.4)	
教科教育経験	13	(4.9)	37	(13.8)	217	(81.3)	—
教科外教育経験	57	(21.3)	33	(12.4)	177	(66.3)	—
実践教育経験	48	(18.0)	—	219	(82.0)	—	

注) 社会福祉専攻学生アンケートより作成。(以下、とくに断りのない限りはすべて同アンケートより作成したものととして、注記は省略する。)

や社会といった教科のなかで社会福祉に関することをとりあげる教科教育、学級会やホームルームなどの時間に社会福祉のことをとりあげる教科外教育、ボランティアや募金、清掃活動などを行なう実践教育の四つに分け、それぞれの教育経験をみた。

表1から、生徒をとりまく環境としての交流教育は比較的なされているものの、より積極的な働きかけとしての教科教育、教科外教育、さらには知識として得たものをより明確にするための実践教育は、それほど行なわれていないことがわかる(ただし交流教育においても、ここでは同じ学校に特殊学級がたんに併設されていたものも含んでおり、健全児と障害児とが、学校のなかでどれだけ交流していたかなどはわからない)。社会福祉専攻学生の教育経験からみた福祉教育の現状も、先に述べたような全国的傾向、北海道での傾向と類似した点が多いといえるだろう。

#### 4 社会福祉専攻学生の家族環境と一般的福祉経験

意図的働きかけとしての福祉教育を受けた経験をあまりもたない学生の多くは、どのようにして社会福祉への関心を高めてきたのだろうか。ここではその点について、無意図的な力、つまり学生をとりまいてきた環境に焦点をあてて、それを家族環境と一般的福祉経験の二つの側面から分析し

たい。なおここで、北星学園大学・心理学コースの1年生49人を一般学生とみなして(ただし、彼らもまた社会福祉学科の学生である)比較検討を試みる。また必要に応じて、秩父別高校生も比較対象としてとりあげることとする。

##### (1) 社会福祉専攻学生の家族環境

表2は、学生の家庭環境について三つの点からみたものを示している。ここから、祖父母との同居経験には一般学生との差はあまりみられないが、片親家族で育った学生は7.1%と、一般学生の4.0%に比べて高い割合を示していることがわかる。また、社会福祉関係の仕事やボランティアをしている家族をもつ学生も18.0%と、一般学生の12.2%、秩父別高校生の10.5%に比べて多いことがわかる。父子家庭で育ったため、父親の老後を考えてヘルパーを志す学生がいたり、ボランティアをする祖母の話や活動する姿をみて社会福祉を志す学生がいたりするなど、普段の生活をともにする家族が福祉意識に与える影響は大きいといえるだろう。また、数字のうえでははっきり表れてこなかったが、同居する祖父母の存在も、彼らの福祉意識に影響を与えていると思う。これは、多くの学生が社会福祉に関心をもつようになったきっかけとして、自分の祖父母の存在をあげることによって確かめられる。

##### (2) 社会福祉専攻学生の一般的福祉経験

次に、学生がこれまでに経験した出来事で、社

表2 社会福祉専攻学生の家族環境

	社会福祉専攻学生				一般学生	秩父別高校生
	北	星	帯	広		
祖父母との同居経験あり	39(51.3)	56(52.8)	50(58.8)	145(54.3)	5(51.0)	—
祖父母との同居経験なし	37(48.7)	50(47.2)	34(40.0)	121(45.3)	24(49.0)	—
N.A	—	—	1(1.2)	1(0.4)	—	—
片親家族	4(5.2)	9(8.5)	6(7.1)	19(7.1)	2(4.0)	—
片親家族以外	72(94.8)	97(91.5)	79(92.9)	248(92.9)	47(96.0)	—
社会福祉の仕事やボランティアをしている家族あり	17(22.4)	17(16.0)	14(16.5)	48(18.0)	6(12.2)	15(10.5)
社会福祉の仕事やボランティアをしている家族なし	59(77.6)	87(82.1)	74(83.5)	217(81.3)	43(87.8)	126(88.1)
N.A	—	2(1.9)	—	2(0.7)	—	2(1.4)

注) 祖父母との同居経験において、日本福祉学院の率が高い。この学校の特色は、福祉対象者のなかでもとくに、老人に重点をおいている点にある。普段の生活から老人の言動にふれ、それによって何かしら問題意識をもった学生が、目的意識をもってこの学校の「特色」を選んだ結果のあらわれではないだろうか。また、社会福祉の仕事やボランティアをする家族の有無において、北星学園大学の率が高いのは、キリスト教精神を校風に掲げるこの学校の性格に起因して、学生の親が教会関係の仕事をしている例が多いためと思われる。

会福祉に関心をもつきっかけとなったものがあるかどうかについてみていこう。表3からわかるように、身近なところに障害者や高齢者がいたことによって、社会福祉に関心をもった経験のある人は、全体で65.9%である。一般学生と比較しても、かなり高い。きっかけとしては、祖父母の病気や老化によるものももっとも多く、28.6%を占めている。「祖父の病院へ見舞いにいき、その時初めて排便しておむつを取り替えているところを見て、お世話してあげようと思った」「家に寝たきり老人が二人もいた」「祖母が痴呆症になり、三年間くらい毎日世話する母をみていて」など、祖父母自身に関するものや、祖父母を介護する母親や看護師の姿、病院環境の不備などに心を動かされ、社会福祉のことに目を向けるようになっていく。その他、家族や親戚、学校などに障害者がいたことによるもの、ボランティアでハンディキャップをもっている人たちとふれあったことによるものなどが、きっかけとして多くあげられている。

彼らがこのような経験をした時期は、小学校31.8%、中学校22.7%、高校35.2%となっている。小、中学校時をあげる学生には、家族や同じ学校内に障害者がいた例が多く、高校時では、高齢者に関わるものやボランティアでのふれあいが目立っている。同じような出来事が起こっていても、それをどのように感じるかは経験した時期によるところが大きいと思われる。物事を問題視できる

ような力がついてくる高校段階で、このような経験をした学生は、進路決定においても、より専門職志向が強くなっている。社会福祉への関心は、経験した出来事や時期などが密接に関わりあって形成されてくるといえるだろう。

また、テレビや新聞、本などをみたことによって、社会福祉に関心をもった経験のある学生は、82.0%もいることがわかる。これも、一般学生に比べてかなりの差がみられる。彼らの心を動かしただけのもの、やはりテレビがもっとも多く、なかでもチャリティー番組としての24時間テレビが目立つ。その他、映画「典子は今」や札幌白石区で起きた母親餓死事件に関するニュース、ドキュメンタリー番組などをあげる学生が多い。

これらを見て関心をもった時期は、小学校17.8%、中学校25.0%、高校43.4%となっている。マスコミからの関心の多くは、ある程度社会福祉のことに對して興味をもち始めた人が、意識的にそれに関する情報を選択しているものと思われる。また、教育段階があがるにつれて興味をもつ人が多くなっていくのは、問題をより社会的にとらえられるようになっていくということが大きいのであろう。いずれにせよ、社会福祉を専攻する学生の8割以上が刺激を受けていることは、マスコミの福祉意識に与える影響力の大きさを十分に裏づけているといえるだろう。

このように、社会福祉専攻学生の社会福祉への

表3 社会福祉専攻学生の一般的福祉経験の有無

	社会福祉専攻学生				一般学生 秩父別高校生	
	北	星	帯	広	学	院
身近な高齢者、障害者から社会福祉に関心をもった経験あり	44(57.9)	70(66.0)	62(72.9)	176(65.9)	22(44.9)	58(40.6)
身近な高齢者、障害者から社会福祉に関心をもった経験なし	32(42.1)	34(32.1)	21(24.7)	87(32.6)	27(55.1)	85(59.4)
N.A	—	2(1.9)	2(2.4)	4(1.5)	—	—
テレビや新聞、本などをみたことによって社会福祉に関心をもった経験あり	56(73.7)	90(84.9)	73(85.9)	219(82.0)	29(59.2)	82(57.3)
テレビや新聞、本などをみたことによって社会福祉に関心をもった経験なし	20(26.3)	15(14.1)	11(12.9)	46(17.2)	19(38.8)	59(41.3)
N.A	—	1(1.0)	1(1.2)	2(0.8)	1(2.0)	2(1.4)

注) 身近な高齢者、障害者から関心をもった経験において、日本福祉学院の率が高いのは、祖父母との同居経験が少なからず影響を与えていると思われる。

関心の多くは、自らのもつ家族環境や身近で体験した出来事が相互に関わり合い、それに経験した時期が密接に関係して高められているように思われる。実際にハンディキャップをもった人たちと身近に接すること、またはそのような情報を、よりリアルな形で見聞することは、福祉意識が高められるうえで欠かせないものであるといえるだろう。

## 5 福祉意識の形成と福祉教育

### —学校における福祉教育の影響①—

意図的な働きかけとしての福祉教育が、公教育の場でまだあまり行なわれていないという現状とも関わって、学生の社会福祉への関心は、家族環境や一般的福祉経験によるものが大きな位置を占めていた。しかしわずかではあれ、これまでの学校教育段階で、実際に福祉教育を受けてきた学生もたしかに存在する。彼らにとって福祉教育というものは、社会福祉への関心を高めるうえでどのような位置にあったのだろうか。そしてそれは、それぞれの学生がもつ家族環境や一般的福祉経験とどのように関わってきたのだろうか。

#### (1) 一般的福祉環境・経験と福祉教育の関係

ここでは、社会福祉専攻学生の福祉意識の形成過程を、個人の一般的環境・経験と福祉教育との関連で考察してみたい。

まず、家族と一般的福祉経験の関係をみてみると、祖父母と同居した経験をもつ学生の方が、わずかではあるが、身近な高齢者、障害者によって、社会福祉に関心をよせている率が高い。これは、学生の多くが福祉に関心をもちようになった身近な存在として、同居する祖父母をあげていることによるものが大きいと思われる。

次に、交流教育と一般的経験との関係をみると、過去に交流教育を受けた学生ほど、身近な高齢者、障害者から影響を受けた経験をもっている(表4)。「学校のなかに障害をもった子がいて一緒に遊んだりしたのに、なぜ一緒に勉強できないのかと思った」「同じクラスにいた知恵遅れの子をだました子がいて、クラスの問題になった」など、同じ学校、教室にいた障害児のことは、人それぞれとらえ方が違うにせよ、記憶のうえで印象深く残っていることをこれらは示している。公教育の早い段階においてこのような教育を行なうことは、福祉意識を高めるうえで、また人格形成のうえで、非常に重要であるといえるだろう。

では、意図的な働きかけとしての福祉教育のなかでも、より積極的なものとしての教科教育、教科外教育と一般的福祉経験との関係はどうなっているのだろうか。表5より、身近な高齢者、障害者によって、社会福祉に関心をもちた経験のある学生ほど、受けた福祉教育に興味を示しているこ

表4 交流教育と一般的福祉経験の関係

	身近な高齢者、障害者から社会福祉に関心をもちた経験あり	身近な高齢者、障害者から社会福祉に関心をもちた経験なし	N.A	計
交流教育経験あり	136(70.5)	53(27.5)	4(2.0)	193
交流教育経験なし	39(53.4)	34(46.6)	—	73
N.A	1(100.0)	—	—	1
計	176	87	4	267

表5 教科教育、教科外教育と一般的福祉経験の関係

	教科教育に興味をもった (少しもったも含む)	教科教育に興味を もたなかった	教科外教育に興味をもった (少しもったも含む)	教科外教育に興味を もたなかった
身近な高齢者、障害者から社会福祉に関心をもちた経験あり	23(13.1)	153(86.9)	61(34.7)	115(65.3)
身近な高齢者、障害者から社会福祉に関心をもちた経験なし	6(6.9)	81(93.1)	14(16.1)	73(83.9)
N.A	3(75.0)	1(25.0)	1(25.0)	3(75.0)
計	32	235	76	191

とがわかる。基盤としてあった、一般的福祉環境・経験に学校での福祉教育が加わり、それが福祉への関心をさらに高めることにつながる場合と、福祉教育がきっかけとなって、それまで気がつかなかった身近な存在に目を向けるようになる場合の両方が考えられる。そういった意味で、一般的経験と福祉教育が相互に関わり合って、学生の福祉意識が高められてきたと考えられる。

また、一般的福祉経験相互の関連性についても、身近な高齢者、障害者によって社会福祉に関心をもった経験のある学生ほど、マスコミからも影響を受けていることから、これら二つの経験も相互に関わり合って、福祉意識に影響を与えていると考えられる。

このように、福祉意識が形成される過程には、さまざまな要素が関わり合っている。家族や学校内での高齢者、障害者と接しているうちに、社会福祉のことに関心をもつようになり、その漠然とした興味、関心を、テレビや新聞、さらには福祉に関する題材を扱った学校教育が後押しして、学生の福祉意識が高められていく。また、特別な家族環境になくても、マスコミから得た情報や学校で受けた福祉教育に興味をもったことによって、社会福祉的なものの見方で、身の回りの社会を見つめることができるようになる。このようにして福祉意識は、それぞれの学生がもつ家族環境や経験、さらには福祉教育経験などが相互に密接に関わって高められているといえよう。

## (2) 福祉教育の影響

以上のようにみると、福祉意識を高めるうえで、福祉教育の影響もたしかにあるということがわかるだろう。むろん、実際に教育を受けた人はまだまだ少ない。しかし、何らかの形で、教えられたことが、彼らのなかに位置づいていたといえるだろう。そこで次に、実際に福祉教育を受けた人に焦点をあて、彼らが教えられたことに対してどう感じたかを中心にみておこう。

先に教育実践上、四つに分けた福祉教育のうち、教科教育や教科外教育を受けた人に対して、教えられたことに興味をもったかどうかについてみる

と、教科教育においては、半数にあたる50.0%の学生が興味をもったと答えている。「少し興味をもった」人まで含めると、受けた人の9割が何らかの興味をもったことになる。また、教科外教育を受けた人では、75.3%が興味をもっており、ここでも「少し興味をもった」を含めると、ほとんどすべての学生が興味をもったことになる。

なお、実際に学校行事として福祉教育を進めている秩父別高校についてみると、この学校では、実践教育を中心とした活動を学年単位で行っており、内容は小学校のプール掃除やドライバーへの安全の呼びかけ、養護学校や老人ホームへの訪問などとなっている。また、生徒会としても活発なボランティア活動を行っており、役員と有志数人で、主に老人ホームへの訪問、独居老人宅の除雪作業などを行っている。これらの福祉教育実践に対する一般生徒の反応は、生徒会役員の話によれば、計画、準備の時点ではあまり関心のない生徒が多く、養護学校へ行く学年の生徒などは、気持ち悪がったり不安がったりしている。しかし、いざ当日になると、みんな楽しそうにとりくみ、老人と真剣にゲームをしたり、障害児と一緒に走り回ったりしている。活動後は、生徒会主催のボランティアに意欲的に参加してくる人もいるが、大半はあっさりしているということであった。普段の授業とは違った環境での勉強に、〈新鮮味がある〉といった感じで、これらの福祉教育をとらえているのであろうか。

しかしともかく、このような生徒の活動前後の気持ちの変化についてみると（表示はしていない）、活動前から興味をもっていた生徒は3割程度だったにもかかわらず、活動後、「よかった」と答える生徒が約57%と大きな変化を示しているのは注目される。「よかった」の内容がもう少し分析される必要があるとはいえ、意図的な働きかけとしての福祉教育は、意識のうえで大きな影響力をもっていたといえるのではないだろうか。また、全体で42.0%の生徒が生徒会主催のボランティア活動に参加しているという事実からも、受動的活動から問題意識をもった主体的な活動への移行

が確認でき、教育の影響力の大きさを裏づけることができるであろう。

以上、受けた人の多くが福祉教育に対して好意的な印象をもっている。福祉意識の形成には、家族環境や一般的福祉経験などのさまざまな要素が関わっており、福祉教育もその一要素を担っているが、それだけではなく、教育独自としての影響力もあるということが、ここから確認されるだろう。

### (3) 福祉教育と社会福祉専攻志向

これまでに述べた福祉教育の影響力が、形としてどのように表れてきているかを、今度は学生の社会福祉専攻理由の面から考察してみたい。

表6をみると、学生たちが社会福祉系の学校を選んだ理由には、専門職につきたいというものがもっとも多く、半数以上を占める。また、専門職とまではいかないが、興味があって社会福祉のことを学びたいと思って入学してきた人も多く、専門職志向の学生と合わせると、77.1%が強い関心をもっている。このような学生のなかで、過去において実際に福祉教育を受けた経験があり、それに興味を示した学生の専攻理由をみると、ほとんどが社会福祉に対して強い関心をもって、学校を選んでいることがわかる。ここからも、福祉教育の意識に与える影響力の大きさをみることができる。

このようにして、福祉教育のはっきりとした影

響がいくつかの分析から確認される。今後この教育が学校教育のなかにしっかりと位置づき、教師にも社会福祉への認識が深まれば、子供たちの福祉意識はもっと高まり、ともに生きる社会の実現に少しでも近づけるのではないかと思う。

## 6 福祉教育の必要性

### ——学校における福祉教育の影響②——

最後に、福祉教育の影響力を、今後の福祉教育に対する専攻学生へのとらえ方という点からみておきたい。社会福祉専攻学生に、教育実践上分けた四つの福祉教育それぞれに対する今後の必要性について聞いた結果によれば（表示していない）、どの教育においても約8割の学生が必要だと答えており、なかでもとくに、交流教育を求める声が多い。「小さいときから一緒に遊んだり、勉強したりしていると、障害者はかわいそうという変な目で見たりすることがなくなり、もっと福祉が社会の中にとけこめると思う」「障害児と一緒に生活することが、肌で感じる本当の意味での学習だと思う」などはその例である。

さらに特殊学級ではなく、ともにふれあうことの重要性についてふれ、それを小、中、高と教育段階があがるにつれて、施設見学やボランティア活動といった実践教育に結びつけてとらえているのも興味深い。教科教育においては、思いやり、たすけあい、差別・偏見をもたない心などの「福

表6 社会福祉関係のコースを選んだ理由

	社会福祉専攻学生				教科教育を受けて興味をもった学生	教科外教育を受けて興味をもった学生
	北星	帯広	学院	計		
社会福祉の専門職に自分からつきたい	20 (26.3)	67 (63.2)	53 (62.3)	140 (52.4)	13 (72.2)	37 (63.8)
専門職とまではいかないが社会福祉に対して興味があり、勉強したい	32 (42.1)	22 (20.7)	12 (14.1)	66 (24.7)	4 (22.2)	15 (25.8)
社会福祉に対して漠然とした興味がある	12 (15.8)	6 (5.7)	12 (14.1)	30 (11.3)	—	3 (5.2)
それほど興味はないが、資格が取得できる	2 (2.6)	9 (8.5)	1 (1.2)	12 (4.5)	—	—
なんとなく	4 (5.3)	2 (1.9)	2 (2.4)	8 (3.0)	—	—
その他	6 (7.9)	—	5 (5.9)	11 (4.1)	1 (5.6)	3 (5.2)
計	76	106	85	267	18	58

注) 学校間でかなりの差がみられる。北星学園大学の学生が専門職を志向するほどまでの強い関心をもてないのは、いくつかの要因があると思われるが、四年制大学であることから、将来の進路を決めるまでにまだ時間があり、早い段階で一つの道に決めてしまうよりも、興味のあることを中心に幅広く学びたい、という気持ちのあらわれが大きいのではないだろうか。

祉教育」から、より具体的な社会福祉の問題や現状を教える「社会福祉教育」までも求めており、高校段階ではとくに、問題解決能力を養うような教育が必要であるとも述べている。福祉教育の必要性は、教育を受けた経験の有無に関わらず、大半の学生が強く感じていることがうかがえる。

また、実践教育を過去に受けたことのある学生ほど、今後の実践教育によせる期待が大きくなっていることも確認される。ボランティア活動のように、社会福祉のことを肌身で感じることでできる体験は、意識に与えるインパクトがより強いと考えられる。この教育経験によって感じたことなどが学生のなかに強烈に残っており、それが教育の必要性となって表れてきたと思われる。

「社会福祉教育」を受けている秩父別高校生においても、全体で4割の生徒が今後の福祉教育に対して積極的な回答を示している（表示はしていない）。社会福祉専攻学生の多くがもっていた家族環境や一般的経験をもつ者が特別多いわけでもない高校生が、福祉教育を受けることによって、この教育の必要性を感じることができたというところに、福祉教育の影響をみることができよう。また、この教育的作用は、福祉教育の必要性を求める生徒の率が、学年があがるにつれて、つまり福祉教育を多く経験していくにつれて高くなっていく（1年生38%、2年生41%、3年生45%）という事実からも裏づけられるだろう。

「私の周りには障害をもつ人がいなかったので、今まであまり考えてこなかったというか、自分には関係ないと思っていた。でもそうではなくて、障害をもった人もいると知った。もっと小さいときにこれに気がついていたら、と思うから」。これは「社会福祉専門教育」を受けてみて初めて、福祉教育について考えた学生の声である。実際に福祉教育を受けた経験の有無に関わらず必要性を強く感じることができるのは、現在受けている専門教育の影響が大きいと思われる。しかし、秩父別高校生からも裏づけられるように、実際「福祉教育」、「社会福祉教育」を受けてきた学生においては、必要性に対する声が一段と高くなることから、

高校までの間に受けた「福祉教育」、「社会福祉教育」も十分影響力があったということがいえるのである。ここに、三つの福祉教育の関連性をみることができよう。

## 7 まとめにかえて

### ——今後の福祉教育実践への展望——

学校において福祉教育というものがあまり行なわれていないことを反映して、社会福祉専攻学生の多くもこの教育らしきものは受けておらず、彼らの社会福祉への関心の高さは、家族環境や身近で体験した出来事などに大きな要因をもっていたといえる。しかし、実際に教育を受けた学生にとっては、福祉教育の影響がたしかな形で福祉意識の形成に役立っていたのである。福祉教育は、家族環境や身近な体験によって高められた社会福祉への関心をさらに促進させる役割を果たしたり、福祉に目を向ける直接のきっかけとなったりするなど、学生の意識に影響を与えるだけの力を十分にもっているといえるだろう。また同時に、学生たちが今後の福祉教育に対してその必要性を強く感じていることも確認された。これには、現在受けている「社会福祉専門教育」の影響が多分にあると思われる。いずれにせよ、社会福祉への関心を高めるうえで、意図的働きかけとしての福祉教育は大きな役割を果たし得ることがいえるのである。

現在の学校教育には、受験教育という名のもとに、学力という一つの価値観だけで人間を判断する傾向がみられる。福祉教育によって、ひとびとのなかから差別や偏見の心が消え、社会福祉問題を自らのものとしてとらえられるようになることは、これからの社会にとって絶対に不可欠であると考えられる。しかしそのこと以上に、福祉教育というものが、これをあえて学校教育のなかに求めることによって、明らかに歪んだ今の教育を変革するための一つの役割を果たすのではないかと思う。「現在の教育のやり方は、他人に対しての思いやりや協調性に欠け、競争意識だけが先走り、自分一人の幸福を願う風潮が見えて大嫌いだ」。この

ような学生の意見は、福祉教育の二重の意味での役割を示唆したものとはいえないだろうか。つまり、社会福祉への理解をより高めるためだけの福祉教育ではなく、学校教育そのものの変革に関わる福祉教育の役割である。今後、福祉教育実践と教師や学校との関係を分析していくことに研究の視点を向けていくことが、福祉教育を考えていくために必要な大きな課題であると考えられる。

## 注 記

- (1) 阿部ゆかり「小学校における福祉教育の現状」『学校における福祉教育実践Ⅰ』福祉教育シリーズ2、光生館、1988年、188、189ページ。
- (2) 阿部ゆかり「同上論文」、191ページ。新井 宏「中学校・高校における福祉教育の現状」『学校における福祉教育実践Ⅱ』福祉教育シリーズ3、光生館、1986年、237ページ。
- (3) 学校数は1989年4月現在、指定校数は、1990年4月1日現在のものである。「道内学校数および指定状況一覧」「学童・生徒のボランティア活動普及事業協力校一覧」『子どもたちのボランティア活動のあゆみ』北海道社会福祉協議会ほか、1990年、56～68ページ。
- (4) 北海道では、5段階評定された学期末の成績を、中1と中2は2倍、中3は3倍して合計したものを内申点としている。最高点は「オール5」の315点、最低点は「オール1」の63点となっており、学校ランク(A～M)は、この315点から63点までの内申点を20点ずつに区切ったもので決まる。指定協力校になっている高校でもっとも多かったのが、Hラ

ンクで12校、つづいてKランクの10校、Iランクの9校など、ほとんどがH～Mまでに偏っている。

なお、これには「全道主要公立高校合格ライン一覧」『道新 TODAY』別冊、北海道新聞社、1987年7月、16～40ページ、「学童・生徒のボランティア活動普及事業協力校一覧」『子どもたちのボランティア活動のあゆみ』北海道社会福祉協議会ほか、1990年、56～68ページの二つの資料を参考にした。

- (5) 「学童・生徒のボランティア活動普及事業資料」北海道社会福祉協議会、1990年、4～7ページ。
  - (6) 本論文には、以下の文献・資料を参考にした。
    - ・一番ヶ瀬康子ほか『福祉教育の理論と展開』福祉教育シリーズ1、光生館、1987年。
    - ・一番ヶ瀬康子ほか『学校における福祉教育実践Ⅰ』福祉教育シリーズ2、光生館、1988年。
    - ・木谷宜弘、大橋謙策『学校における福祉教育実践Ⅱ』福祉教育シリーズ3、光生館、1986年。
    - ・阪野 貢『社会福祉教育論序説』相川書房、1984年。
    - ・野上芳彦『福祉教育』相川書房、1985年。
    - ・北海道社会福祉協議会「学童・生徒のボランティア活動普及事業資料」1990年。
- ※ 本論文の作成にあたっては、実に多くの方々にお世話になった。アンケート調査に協力して下さった、秩父別高校の山田英治先生はじめ諸先生方、北星学園大学の白沢久一先生・松井二郎先生、帯広大谷短期大学の松本伊智朗先生、日本福祉学院の横山穂先生、また、貴重な資料やお話を提供して下さいました。北海道ボランティアセンターの平中忠信さん。本当にありがとうございました。